

【ショートレター】

留学生の帯同家族を対象とした、親子参加型日本語教育支援の実践†

服部 明子*・松岡 知津子*²・吉田 真理子*
三重大学教育学部*・三重大学地域人材教育開発機構*²

本稿では、本学留学生の帯同家族を対象とした、親子参加型日本語教育実践について報告する。現在、留学生数は年々増加しており、日本語教育を含めた留学生への支援には力が入られている。しかし、留学生が配偶者や子どもなど、家族を帯同して来日する場合のサポートに日本語教育は含まれていない。留学生の配偶者や子どもは、生活者として地域で居住する際、日本語能力を学ぶ機会がなく、生活そのものが困難であるという現状にある。そこで、筆者らが連携し、教育学部日本語教育コース、国語教育コース、幼児教育コースの学生にボランティアをよびかけ、学生主体で配偶者の家族を対象とした、親子参加型の日本語教育支援を行った。

キーワード：留学生の帯同家族、親子参加型日本語教室、日本人学生

1. はじめに

本稿は、2016年度に行った、留学生の帯同家族を対象とした、親子参加型日本語教育における取り組みについて報告するものである。

1.1. 大学の留学生受け入れに関する動向

まず、留学生受け入れに関する近年の動向をまとめる。大学のグローバル化推進の動きは、年々高まっており、留学生の受け入れも促進している。2012年に約14万人の留学生を2020年までに留学生交流を倍増させ、30万人を受入れようとする「留学生30万人計画」(平成20年、文部科学省、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省)、2025年までを視野に入れた、長期戦略指針「イノベーション25(平成19年6月1日閣議決定)」などを見ても、留学生の受け入れは、日本のグローバル戦略の一環として位置づけられているといえる。

平成28年5月1日時点で外国人留学生数は、239,287人となっており(「外国人留学生在籍状況」(独・日本学生支援機構))、前年より30,908人(14.8%)増加している。本学に目を向けると、平成29年5月1日時点の留学生総数は295名であり、ここ数年は300名前後で推移している。第3期中期目標にも「大学と地域のグローバル化の推進」が掲げられており、第2期(平成22~27年)より、第3期には、留学生を平均より10%増加させることが目標とされている。新たな価値や社会変化の創出、大学の国際化への期待が留学生受け入れを加速させており、今後留学生の存在はさらに大きくなると考えられる。

1.2. 留学生の帯同家族への支援

次に、留学生の帯同家族とその家族が置かれた状況について述べる。

第1節で示した「留学生30万人計画」においては、留学生の家族も含んだ支援が重要であると述べられている。本学の支援は年々充実の傾向にあり、本学に来日した学生への日本語教育は国際交流センターをはじめとする部局で行われている。しかし、留学生の帯同家族には日本語学習の機会の提供はまだない。

留学生が家族を帯同して来日する際、配偶者だけでなく、幼い子どもと来日するケースが少なくない。子どもが一定の年齢であれば、大学周辺の幼稚園や小学校などの教育機関に通学可能であるが、受け入れ年齢に満たない子どもは家庭で保育を受けることになる。乳幼児がいる留学生の帯同家族は、外出がままならず、日本で暮らしていくための日本語を学ぶ機会もない。そのため、買い物に行くといった日常生活すら不便な状態となることもある。津市内には、ボランティア団体によって運営されている日本語教室もあるが、留学生の家族が自らの生活圏や日課に適した教室を見つけ、そこに継続的に通うことは困難である。

他大学に目を向けると、留学生の帯同家族に日本語教育による支援を行っている大学は少なくない。ただし、渡部(2011)が示したように、その主たる支援者は地域のボランティアである。留学生の帯同家族は大学運営側からみて「業務外」「支援の範疇外」と捉えられていることが多いためである。渡部(2011)では、こうした地域ボランティアによる日本語教室の提供には課題もあり、

支援される側の留学生の受けとめ方がさまざまであること、地域ボランティア団体も財政や人員確保の面で運営上の問題を抱えていることが指摘されている。

2. 本取り組みの経緯と概要

2.1. 本取り組みの経緯

本取り組みは、部局を跨いだ連携により、実現した。連携の意図は、(1) 留学生帯同家族への留学生支援の一環としての日本語教育の提供、(2) 日本語教育に関心のある日本人学生と多文化保育に関心のある学生を対象とした教育を同時に行うことであった。

連携の経緯を述べる。まず、2015年度に日本語教育を専門とする教員2名(服部, 松岡)が意見交換を行う中で、留学生の帯同家族への日本語教育が課題であること、教育学部の日本語教育コース学生に対する実践の機会が少ないという問題が浮び上がった。教育学部には、日本語教育コース(2015年度学生募集停止)があり、日本語教育に関わる人材の養成が行われている。2016年4月からは、国語教育コースのカリキュラムの一部に、日本語教育に関する科目が設けられた。しかし、一般的に、経験のない学部学生が、実際の現場で、日本語教育を実践することは困難である。そこで、教員2名の指導のもと、教育学部日本語教育コースおよび国語教育コース学生が主体となって留学生帯同家族を対象としたボランティア日本語教室を開き、それを「日本語教育実習(2単位)」の一部として扱うことにした。

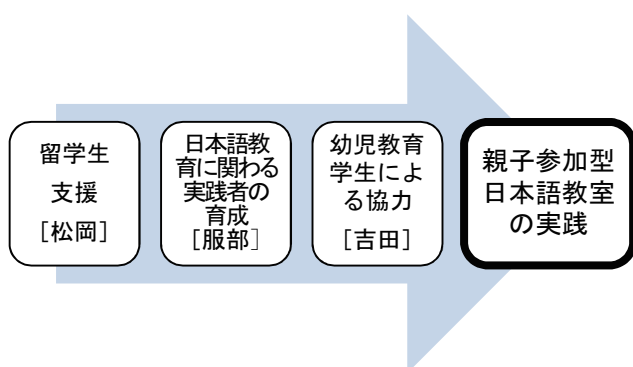


図1 本取り組みにおける連携の過程

本取り組みにおける連携の過程は図1の通りである。本取組を進めるにあたり、日本語教育および留学生教育に携わる研究者のネットワークを利用し、他大学の取り組みに関する情報を収集した。また、幼児教育を専門とする教員1名(吉田)に協力を仰ぎ、乳児・幼児がいても参加できるよう、幼児教育コースの学生にボランティアを呼びかけ、保育の現場でも増加する外国につながる

子どもに接してもらいたい旨を伝えた。

2016年度前期から日本語教室開設の準備を行い、後期に実施した。まず、日本語教育コース学生および国語教育コース学生を対象に、ボランティア希望者を募った。学生と教員の間で昼休みの時間を利用し、定期的にミーティングを実施した。日本語教室の内容・日程がほぼ決まった時点で幼児教育コースの学生を対象に、参加を呼びかけた。支援者の所属および人数を表1に、準備段階における前期の活動を表2に示す。

表1 支援者

大学生	9名(日本語教育コース2年生3名, 3年生2名, 4年生1名, 国語教育コース1年生2名, 幼児教育コース3年生1名)
教員	3名(日本語教育:服部, 松岡, 幼児教育:吉田)

表2 前期・準備段階における活動(内容)

1	5/8	ミーティング(自己紹介)
2	5/12	国語教育コース1年生への呼びかけ
3	5/26	ミーティング(進め方の確認)
4	6/9	ミーティング(対象者, 使用教材)
5	6/16	ミーティング(シラバスの検討)
6	6/23	ミーティング(ニーズ調査の項目)
7	6/29	インタビュー(ニーズ調査の実施)
8	6/30	ミーティング(ニーズ調査の結果)
9	7/6	ミーティング(文法項目の決定)
10	7/20	幼児教育コース学生への呼びかけ
11	7/21	ミーティング(子どもへの対応)
12	8/20	模擬授業

国語教育コース1年生2名は、日本語教育に触れた経験がまったくなかったため日本語教育がどのような対象者に・どのように行われているかをイメージすることが困難であった。そこで、日本語教育コース所属の3年生もしくは4年生とそれぞれ上級学年の学生とペアを組んでももらうことにした。また、日本語教育コース2年生も日本語教育に対する基本的知識は学んだとはいえ、授業を見学した経験はなかった。そのため、夏休み中に教員による模擬授業の時間を設け、日本語を学んだことのない学習者に、日本語の教え方を具体的に示した。模擬授業の後、授業計画案について相談時間も設け、教員が指導を行った。

2.2. 日本語教室の概要

日本語教室の対象は、日本語学習の機会をもっとも必

要としていると思われる、「日本語学習経験がない」「生活をする上での日本語を学びたい」留学生の帯同家族とし、幼稚園入園前の年齢の子どもがいることが多く、非漢字圏であるアフガニスタンとインドネシア出身者に絞って募集することにした。

日本語教育において、まず、「コース・デザイン」と呼ばれる作業が行われる。一般的に、コース・デザインでは、学習者の要望を把握するニーズ調査と、どのような背景の学習者であるかを探るレディネス調査によって、どのような内容を・どのように教え・どのような教材を扱い、どのように評価するかなどが決められる。本実践は、対象者をあらかじめ絞ったため、表2に示したように、ニーズおよびレディネス調査の実施前に、日本語を初めて学ぶ学習者向け教材『みんなの日本語』を参考にすることにし、帯同家族が実際に遭遇しうる生活場面とそこで使用される日本語表現・会話を想定し、大まかなシラバス案を討論した。その上で、配偶者を日本語教室に通わせたいアフガニスタン人留学生1名、自身が留学生の帯同家族であるインドネシア人1名の合計2名にインタビューを行い、ニーズとレディネスを探った。日本人学生が質問を考え、生活でどのようなことに困難を感じているのか、都合のよい日時はいつかなどを英語で尋ねた。教員1名もインタビューに付き添い、日本人学生の質問が不十分であれば、補足で質問をした。インタビューで得られた回答をミーティングで検討し、学習内容（表3および資料1参照）に反映させた。日本語教室の時間は、13時から10分の休憩を挟んで14時半までとし、前半と後半を40分で区切った。また、日本人学生には、必ず1人40分以上の授業を担当するよう指示した。また、教室の前方に留学生の配偶者が座り、同じ教室内の後方で子どもたちと授業担当者以外の日本人学生が遊ぶことにした。子どもに対する活動は、幼児教育コース学生が中心となって行った。授業後、日本語教育を専門とする教員から日本人学生へ教授内容や方法などに関するフィードバックをできるだけ早い段階で行った。

表3 文法項目

1	10/5	教室についての説明, 自己紹介, あいさつ・教室用語の導入, 平仮名・片仮名表の配付
2	10/19	①指示詞, yes/no 疑問文, ②疑問詞疑問文
3	10/26	①方位詞, ②疑問詞疑問文
4	11/2	①『みんなの日本語』第5課の会話練習
5	11/9	①N1は〇〇語でN2です
6	11/16	①『みんなの日本語』第10課会話練習
7	12/7	①わたしはNがほしいです

8	12/14	プロジェクトワーク「かいものをする」
9	12/21	①復習ゲーム, ②歌とダンス, ③まとめ

資料1 留学生帯同家族を対象とした募集ポスター

Japanese Language Class 2016 (For Beginners)
 しょきゅう にほんごきょうしつ 2016 Wednesday 13:00-14:30

①	10/5th Wednesday	13:00~14:30	オリエンテーション・じこしょうかい・かいもの フレーズ Orientation・Introduction・Shopping phrase
②	10/19 Wednesday	13:00~14:30	かいもの フレーズ Shopping phrase
③	10/26 Wednesday	13:00~14:30	みちを さく Ask the way
④	11/2 Wednesday	13:00~14:30	でんしゃや バスに のる Get on the train or bus
⑤	11/9 Wednesday	13:00~14:30	ものな まえを さく Ask the name of thing
⑥	11/16 Wednesday	13:00~14:30	ものを さがす Look for the thing
⑦	12/7 Wednesday	13:00~14:30	かいもの フレーズ Shopping phrase
⑧	12/14 Wednesday	13:00~14:30	かいものに いこう! Go shopping to AEON!
⑨	12/21 Wednesday	13:00~14:30	まとめ・パーティー Summary・Party

・ Place : MIE daigaku kyoiku-gakubu iti-goukan nikai tikkirenkei Bahitu
 三重大学教育学部1号館2F地域連携B室 Map: <http://www.mie-u.ac.jp/en/about/map/>

・ Contact Us (E-mail) : hattori@edu.mie-u.ac.jp
 ・ Address: MIE University Faculty of Education, Kurimamachiya-cho, Tsu, Mie
 ・ せんせい: みえだいがく きょういくがくぶ かくせいボランティア (volunteers)
For family members of International students, Mie university
 Participation fee: Free!! We have babysitters!!

2.3. 学習者

2016年度後期に入り、日本人学生が作成した日本語教室募集のポスターをアフガニスタンとインドネシア出身の留学生に配付した。日本人学生への教育的側面から、少人数のクラスとなるよう、人数制限を行った。参加者（学習者）は表4の通りである。

表4 参加者（人数）

学習者（親）	インドネシア (5), アフガニスタン(3), バングラディッシュ(1)
子ども	0歳児(2), 4歳児(3)
来日時期	来日直後(1), 6か月前(1), 7か月前(1), 9か月前(1), 1年前(2), 1年半前(1)
帰国予定年	1年後(1), 2年後(4), 3年後(2), 未定(1)

20代から30代で、1名を除き、全員女性であった。日本語学習未経験者を想定して募集を行ったが、実際には経験者もあり、文字（平仮名・片仮名や簡単な漢字）を書くことができる参加者も4名いた。

子どもについては、表4以外に、2名が最終回のみ参加した。いずれも5歳以上の子どもであった。これは、近

隣の幼稚園が2年保育の体制であり、5歳以上の子どもは幼稚園に通園していたためである。

3. 学習者の声

最終回である12月21日に学習者を対象にアンケートを実施した。アンケート結果の利用方法について説明を行い、同意書に署名を得た。短時間で回答できるよう、項目は①授業の難易度を答え、②意見や要望を自由に記述してもらうことの2点とした。

①授業内容について、難易度を1から5段階で尋ねた結果、1は2名、2は1名、3は3名、5は1名であった。3と回答したうちの1名は「授業によって(難易度は)バラバラ」であったと余白に記した。②意見や要望については、原文のまま、以下に示す。

- ・ これからもこの教室を続けてほしい。(2名)
- ・ Enjoy, Fun.
- ・ This class is easy. I like this play very much, I enjoy the play.
- ・ I like when the class has so many games, so it made us easily understand the lesson.
- ・ will continue, Japanese real language
- ・ I think this Japanese class very useful for daily conversation. I hope this class will be continued next year. Thank you very much for teaching us!

4. まとめ

日本語教室に参加した学習者は、全員が日本語学習が全くの未経験ではなかった。しかし、1.2で述べたように、生活のなかで日本語を話す機会は乏しく、簡単な文法や文字を理解していてもそれを会話にすることは少なく、生活の上では困難を抱えていた。学習者にとっては、日本語教室が運用能力を高めるための練習の場となったと思われる。

印象的だったのは、第1回台風接近により雨が降っていたにもかかわらず、教室にやってきた学習者たちである。警報は発令されておらず、休講措置もなかったとはいえ、雨の中幼い子どもを抱え、ベビーカーを押して教室にやって来た。親子がともに参加できる日本語教室は、帯同家族が日本で生活する上での居場所づくりに通じる支援だと考えられる。

日本人学生にとっても、日本語教育を包括的に体験できる、貴重な実践の場となった。また、幼い子どもに慣れておらず、どう接してよいか分からなかった日本語教育コース・国語教育コース学生は、幼児教育学生とともに活動する中で、外国につながる子どもへの接し方を学

んでいく姿が見られた。

一方、日本語教室の運営を充実させるためには、学習者の生活により役立つ内容を提供することと、学生の教授能力を向上させることが欠かせず、今後さらに教員間の連携および指導が重要になると考えられる。また、支援者である日本人学生がどのような学びを得られたかについても検討する必要があると思われる。

本取り組みを通し、多方面での連携によって、大きな効果が生まることが示唆された。今後も改善を加えながら、取り組みを続けていきたい。

参考文献

- スリーエーネットワーク編(2012)『みんなの日本語初級 I 第2 版本冊』スリーエーネットワーク
- 渡部留美(2011)「地域ボランティアによる外国人留学生の家族への支援-PAC 分析を通してみえるもの-」『留学生交流・指導研究』13号, 73-84.
- 内閣府「イノベーション25(平成19年6月1日)」(<http://www.cao.go.jp/innovation/>) (2017年10月30日)
- 文部科学省「大学生等の留学生交流・国際交流の推進について」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/main4_a3.htm)(2017年10月30日)
- 文部科学省『「留学生30万人計画」骨子の策定について」(平成20年7月29日)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm)(2017年10月30日)
- (独) 日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況」(http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/index.html)(2017年10月30日)

† HATTORI Akiko*, MATSUOKA Chizuko*², YOSHIDA Mariko*³ : Practicing Participatory Japanese Language education for international Students' accompanying family members

* Faculty of Education, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

² Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

(2017.10.30 受付, 2018.1.4 受理)